■論文

民俗学とフィールドワーク—必要性と可能性—

倉石　あつ子

はじめに

二〇〇〇年の話題になった映画、なかにし礼原作の「長崎ぶらぶら節」は古賀十二郎という学者と長崎丸山町の芸者愛八とが「長崎ぶらぶら節」という古くから伝わる歌を訪ねて歩く物語である。当然、小説だから学者と芸者の間には熱い思いが湧きあがりやがて二人は結ばれるという、お決まりの筋書きが背景にある。吉永小百合と渡哲也という往年の日活青春コンビが、映画を盛り上げていることは言うまでもない。しかし、原作はまさにフィールドワークをどのように行うかという、フィールドワーク論を背景にもって展開される。ひとつの歌を訪ねて方々を歩き回り、とうとう深堀町の教会から流れくる歌声に耳を奪われたところで物語りはクライマックスに到達する。愛八は不細工だが三味線の名手である。歌は採譜するか音階を正確に覚えて、誰かに伝達しなければ途絶えてしまう。そこで、愛八の三味線が役立つというわけである。学問的な意味はわからず、ひとえに古賀の役に立ちたいと古賀に従う愛八だが、古賀と行動をともにするうちに学問の何たるかも分かってくるというあたりを、なかにし礼は丁寧に描いている。それは時には過酷な作業であるが、目的のものに出あったり探し当てた喜びは、また格別なものであることを「歌探しも容易なことではなかですね」「これが学問たい。自分の目で見て、自分の手で確かめる。そこに学ぶことの喜びがあったとい」という、簡潔な会話で表現している。じつは、これが民俗学のフィールドワークでもあるのだ。

人は自分の生まれ育ったところの習俗や価値観に拠って立った生活をしている。それは他の地を見なければ比べようもなく、あたりまえのこととして終わってしまう。ま

た、違った習俗や価値観についての話を聞いても、それは話であってなかなか実感を伴うものではない。したがって、旅をして今までに見たり聞いたりしたことのなかったものに出会ったとき、大きな感動を覚えたり戸惑いを覚えたりする。いわゆるカルチャーショックを受けることになる。そして、落差が大きければ大きいほど、そのショックも大きいことになる。民俗学は、こうした知らなかったことに対して意外と簡単に知的欲求を満たしてくれるように錯覚され、そこに親しみを覚える人も多い。

げんに、民俗学を余りよく理解していない人から「いいわね、いつもあちこち旅行ができて。楽しいでしょう」と言われることがしばしばある。そんなときは「そうですね」と言いつつ、「旅行とは違うんだよなあ」と密かに思ってしまう。なぜなら、フィールドワークに出かける者にとっては、必ずしも楽しいとばかりも言っていられないことが多く、期待していたような成果が上がらない場合も少なくないからである。それでもフィールドに出かけていくのには、やはりそれなりの意味があるからこそ行っているのである。

近年、フィールドに出たがらない研究者も増えてきていると聞くが、筆者は民俗学はフィールドワークがあってこそ成り立つものと考えている。なぜなら、民俗学が研究対象とする日本人の生活文化は、日常生活の中で繰り返されるものであるために当たり前のこととして文字による記録は少なく、人や家ごとに口伝えや体験などによって伝達継承されてきたものがほとんどである。人の記憶や体験をたどらなければ明かにならないものが多いのである（もちろん、文献を無視するということではない。どちらにより重点をおくかという問題である）。苦しいと言いつつ、そして時には「ああ　面倒だ」と言いつつ出かけたフィールドで、文献資料にあった伝承事象を確認したり、実物に触れたときの喜びは、やはり苦しさに勝るものがある。本稿では、民俗学におけるフィールドワークの必要性と、フィールドワークの可能性について考えてみたい。

一　民俗調査（フィールドワーク）とは

日本民俗学は私たちが現在生活している社会（民間）に伝承されている様々な事象を研究対象とし、社会・文化の歴史的由来を明らかにすることにより、日本文化の性格と本質を究明しようとする学問である。歴史的由来を明かにするという目的を含んでいるために、ともすれば懐古趣味的な学問と思われがちだが、実際には私たちの身の回りに派生する問題を私たちの生活を省み、解明することによって問題の解決を図ろうとする。その問題解決のために必要な事象を調べる作業が、フィールドワークである。古くは民俗採集・民俗採訪などとも言った。フィールドワークの

仕方にはいくつかの方法があるが、これまで主としてとられてきたのは問題意識を持った調査者が直接現地に行き、話者と呼ばれる資料提供者と対談聞き書きをして資料を得てくる現地調査方式である。これを民俗調査と呼んでいる（以下、今日一般的に使われている民俗調査という語で統一していく）。

日本民俗学における本格的な民俗調査の始まりは、山村調査であった（註1）。山村調査は一九三四年（昭和九年）から四年の歳月をかけて、柳田国男の指導のもと、全国五十余個所の山村の習俗を、一定の項目を調査目安として調査し、報告したものである。

当時、日本民俗学は柳田国男による民俗学の構想がまとまりつつある時期にあたり、「民間伝承論」の講義が毎週木曜日に行われ、平行して「郷土生活の研究法」執筆のための会合も頻繁にもたれていた。山村調査は、そうした講義や集まりに参加している人々が中心となって行われたのである。参加者は山口貞夫・杉浦健一・大間知篤三・瀬川清子・佐々木彦三郎・大藤時彦・倉田一郎・小寺廉吉・守随一・最上孝敬・金城朝永・橋浦泰雄・河本正義・関敬吾・松岡かつみ・桜田勝徳・山口康雄・織戸健造・後藤興善・比嘉春潮・宮本常一・杉浦瓢・大島正隆・牧田茂他十三名で（総勢三十七名）、参加者の多くが後々まで第一線の研究者として活躍している。そして、この調査は、調査に参加した人々は勿論、日本民俗学においても調査の型ともいうべきものが生み出された、大きな意味を持った調査となったのであった。

調査の成果は『山村生活の研究』（註2）という一書にまとめられている。調査地は「一府県一箇所以上、互ひに若干の距離を有して隔離され、且つ比較的交通機関に恵まれず、所謂世間との往来の制限せられたる村落、然も従来生活調査の未だ試みられざる山村を、原則として選んだ」（註3）と選定理由を述べている。本格的な民俗調査の対象地は、世間との往来が困難な山村であった。山村調査に続いて海村調査が行われるが、民俗学が一九六〇年代まで主たる調査対象としてきたのは農山漁村であった。一九六〇年代後半からの高度経済成長期を迎えるまでは、それぞれの農山漁村には固有の習俗が色濃く残り、それは言い換えれば伝統的で古風な習俗でもあると考えられていた。

明治維新以降、西洋文化が雪崩のように入ってきて、人々がその西洋文化を受け入れ、ともすれば日本古来の文化を軽視するようになったため、日本の伝統的な生活文化の中に伝わる良さまで失われてしまうのではないかという危機感を持って登場したのが柳田国男であった。したがって、比較的そうした影響を受けにくい特に交通の不便な偏狭の地にある山村の伝統文化をなんとか資料として残そうという目的が調査の根底にあった。それは、民俗学が成立

した要因とも大きく関わるものであった。関敬吾は民俗学的研究を促した主要な原因として

①他民族との接触による自民族文化との一致ないしは差異の発見と認識、いわば空間的な文化の相互関係に対する興味によるもの

②自民族文化の変遷と発展、いわば歴史的・時間的興味にもとづくもの

という二点を揚げ、自民族文化に対する歴史的な反省は、過去の文献記録と、現存の伝統的生活様式の中に求めなければならないと、民俗学の方向性を明確に示している（註4）。民俗学は歴史学と文化人類学に境界を接しているが、民俗学の研究対象は無記録文化であり、その無記録文化の資料は現実生活の中に求め、現実の生活を調査することによってある程度の時間を遡り変遷のようすも知ることができるという考え方であった。簡単に言うなら、文字には書かれなかった庶民（民俗学では常民といい、庶民とは少し意味合いが違うがここではそれについて論じない）の生活文化を研究対象とする学問であり（それは現在も変わりがない）、その生活文化は無記録文化であるから、現在生きてこの世にいる人に自分の体験を語ってもらい、調査者（研究者）はそれを聞き取って文字化するという方法をとることになる。

こうした民俗学の成立目的と時代背景からすれば、その研究対象地は比較的古い伝統文化を有する所ということになる。したがって、調査対象地に比較的近代文化の流入がゆるやかだと思われる、山村が選ばれたのは自明の理であった。さらに調査地の中でも、できるだけ生活経験の長い「古老」と呼ばれる人々から話を聞くことによって、現在の生活との歴史的変遷を知ろうとしたのである。

しかし、民俗調査は歴史的な変遷に対する関心だけから行われたわけではない。「伝統文化の現在的意味に関する関心」（註5）も当然ながらもたれるようになり、後々そうした関心は「都市民俗学」「医療民俗学」「環境民俗学」（註6）などといった分野を生み出すことになる。

こうして一九三四年に始まった民俗調査は現在に至るまで続けられ、膨大な庶民生活資料を蓄積してきた。だが、当初の調査方法がそのまま現在まで踏襲されているわけではない。調査の目的が変化するにしたがって、また社会情勢の変化によって、調査の内容も変化してきた。では、民俗調査はいったいどのように変化してきたのであろうか。特に、現在、民俗調査に対して研究者たちはどのように考えているのであろうか。

二　民俗調査に対する考え方の変遷

一九三四年に行われた民俗調査は、前節で述べたように

柳田国男主導によるものであり、調査地の選定も調査項目も柳田の問題意識（好み）が色濃く反映されたものであった。全国五十箇所にも及ぶ調査地があるにもかかわらず、調査項目は共通のものであり、様々な地域差を考慮したものではなかった（表1）。更には「山村調査」に引き続き行われた「海村調査」も「山村調査」の項目を引き継ぎ、項目数が百あるところから百項目調査などとも呼ばれている。ともあれ「山村調査」は、民俗調査の基礎を作り、一つの型を作って一九三〇年代後半から民俗学を志す研究者の調査の目安として機能した。第二次世界大戦中は「山村調査」に従事した研究者の多くが応召され（中には命を落とした人も何人かいる）、調査は女性研究者の手に委ねられたり調査どころではないといった時期を経て、敗戦後世の中が落ち着くにつれて再び調査が開始されるようになる。再び学問ができるという喜びと共に、過去に行っていた調査の型が果たして有効だったのか否かという問いも研究者それぞれの間に生まれることになる。

大間知篤三は「民俗調査の回顧」（註7）のなかで、「山村調査」を基本にした民俗学の調査方法の問題点を以下のように総括している。

①一つの調査地に対して、調査期間が短すぎる

②数字に関する項目（村の面積・人口・戸数・部落数）がまるでない

③古文書・古記録類の軽視

④伝承者からの聞き書きだけを綴って満足している調査者の態度（分析や理論の再構築がない、あるいは調査地の実態を描き出している民俗誌が少ない）

⑤民俗語彙重視による弊害（事実あっての名称であり、語彙の収集に力を注ぐのは本末転倒である）

⑥同一の調査項目による統一調査の問題点（村の特徴が考慮されず、こまぎれの事象を捉えたにすぎない）

この大間知の指摘のいくつかの点は、現在の民俗調査にも通ずるところがある。①の問題は現在の民俗調査にもいえることである。大間知は「山村調査」が始まる年の二月に東京都の神津島に渡り、花正月を見学している。後日『神津の花正月』という優れた民俗誌を顕わしているが、「一ヶ月以上、せめて三ヶ月なり、半年なりをかけて、ゆっくり腰を落ち着けて調査をしたことがない」（註8）と述懐しているところから、神津島にも一ヶ月以上はいなかった。「山村調査」も四つの村に二回ずつ行って、二十日あまりという短い期間で調査している。「山村調査」が後々の民俗調査の元の型を作ったと述べたが、調査日数においても「山村調査」の時点で型はほぼ作られたと見てよい。島嶼部などの調査の場合には交通の便や費用のこともあり、長期間の滞在をすることはあっても、そうでない場合は二泊三日・三泊四日などが普通で、一週間・二週間な

表1　山村生活調査項目（昭和十一年度使用）『山村生活の研究』より

一　村の起り　其の言ひ傳へ、一番早く開けた所、舊家。
二　村の功勞者　功勞者として記憶されて居る人。
三　村の大事件　部落の内外によらず、また吉凶何れでも。
四　村の暮し　その最も樂であった時代は何時か。精神的物理的両方面に於いて。
五　家の盛衰　その原因は如何。
六　職業の變遷　新しく始まった職業、亡びた職業。
七　燒畑作り　何を作るか。
八　山小屋　その建て方、そこでも食物、作法、禁忌。
九　買ひ入れる物　どうしても外から買はなければならぬ物、外へ賣り出す物。
一〇　買物の場所　其處への距離　行く度數、市日。
一一　物賣り　物賣りや仲買人は何所から来るか。
一二　賣り意外の來り人　鍛冶、遊藝人、御札配り等と村との交渉。
一三　明治以後の土着者　定住の手續や條件等。
一四　出稼　出稼に行く地方。
一五　村出身の成功者　彼等と村との關係。
一六　歸村者　彼等の世間觀、それに對する村人の感想。
一七　村の組織　その變遷、指導者。
一八　講の種類　組との關係。
一九　女性の講　女性のみで作る講。
二〇　勞力の協同と交換　ユヒやモヤヒをする機會、方法。
二一　相互扶助　幸不幸に拘はらず、手傳ひや加勢の機會、方法。
二二　大災難時の援助　火災や變死人等の場合の互助慣習。講や組との關係。
二三　共有地　共有の山野田畑の利用法。特定の家を優遇する例。
二四　共有財産　その収益の處分法。
二五　狩獵　獲物の分配法、狩獵の指揮者。
二六　村づきあひの義理　村附合で親類以上に大切とされるもの。
二七　村制裁　村の秩序破壞者に對する制裁の種類、その變遷。
二八　村の公と私　それを表す言葉。
二九　家の格式　それによって家は幾つかの段階に分かるか。格式は如何に表れて居るか。
三〇　家印其他　山印・木印の種類。家號。
三一　財産の繼承分配　隱居と祭祀、隱居の財産。分家慣習、昔からあつたか。
三二　假の親子　その種類、義理。親戚をも親分にたのむか。
三三　同族　同族結合の儀式、姻戚との差違。
三四　同族親類の義理　冠婚葬祭、正月盆其他の機會に於ける。
三五　義理固さ　それは人によるか、一家一族の風か。
三六　異常人物　大力、大食、歌上手等。家筋があるか。
三七　笑ひ　笑いひの種類と機能。笑はせる人。
三八　誉められる若者・女性　その規準。
三九　若者組　加入脱退、宿、活動の機會。青年團と關係。同齢感覺。
四〇　子供組　その活動する場合。若者組との關係。
四一　産屋の行事　産の忌、産児と産婆の關係。
四二　氏子入り　七歳でするか。氏子札はないか。
四三　娘仲間　その附合、宿、婚姻との關係。
四四　夜なべ　夜業の季節と方法。
四五　女の仕事　女の仕事と定まつて居るもの。女の私財。
四六　遠方婚姻　どんな場合に、またどんな家が村外婚をして来たか。
四七　隣村との關係。特に仲良い村・悪い村。その理由。

四八　他村からの手傳　その機會と方法。
四九　奉公人　主家との關係は永續的か。何處から來るか。
五〇　奉公人の居安い家　居にくい家とはどんな家か。
五一　普通食物　その標準、回數。米以外の主食物。
五二　特殊食物　作る機會は何時々々か。
五三　酒宴　その機會、饗慶の仕方。
五四　寄合の座席　年齢順か。寄合入費の分擔法。
五五　分配する食物。その機會範囲。送り膳、蔭膳。
五六　贈答の機會　土産を配る場合も。
五七　晴着　その名稱、種類。用ひる場合。
五八　仕事着　その名稱、種類。
五九　圍爐裏の座席　その名稱、横座を讓る客人。聟の座席。
六〇　間取り　デヰの使用法。
六一　門松　一番大きな門松を立てる場合。年木を飾る所。
六二　嫁の入口　入口の作法。
六三　棺の出口　出棺時の行事。
六四　忌中の作法　忌のかゝる人の食物。忌晴れの順序。
六五　盆の佛迎への入口　盆火を焚く所、精霊棚の場所。
六六　盆の佛迎へ　その行く場所。寺か墓か。両墓制。
六七　最終年回　何回忌か、その時の作法、特に墓地に於ける。
六八　先祖祭り　その足らぬといはれる場合。
六九　同族神　同族で祭る神。同族の墓場。
七〇　屋敷神　その由來、祀る家。
七一　植物禁忌　屋敷や畑に植ゑることを忌む植物、その言ひ傳え。
七二　氏神の嫌ふ動植物　氏子として飼えへぬ動物、植ゑぬ植物。
七三　禁忌　一般に村人が忌み慎しみ、爲ないこと。
七四　祭と慎み　祭禮前に於ける村一般の慎しみ。
七五　頭屋・神役　彼等の祭禮前の慎しみ。
七六　御供田　御供田の管理法と世話人。氏子總代との關係。
七七　庄屋筋と氏神　草分けや庄屋筋と氏神との關係。
七八　宮座　氏神や神事の座席と家柄や年齢との關係。
七九　氏神參りの歸村　他所へ出て居る者が氏神參りに歸村する場合。
八〇　山の神　山の神は女神か。祀る場所、時、方式。
八一　神に祀られた人　土地の者で古く神に祀られてゐる例。
八二　信心深い青少年　若い者で特に神信心の强い例。
八三　信仰の神佛　土地で特に信心されて居る神佛。
八四　祟る所　特によく祟る場所。木、石、塚等。その由來。
八五　入らず山　木を伐るのを恐れ、燒くことを忌む山、持つのを嫌がる畑。
八六　神罰　神の祟りの實例、不信心者への罰。
八七　神の加護恩寵　その實例。それを受けた場合の御禮參り。
八八　怖しい響　怖しい響や光り物を見た話。
八九　狸貉の怪　その悪戯　何に化けて出るか。
九〇　魔物を避ける手段　變化物や魔物を避けるには如何なる方法によるか。
九一　前兆　御知らせや夢の御告の實例。
九二　ト占　神意を知り吉凶をうらなふ方法、種類、技術。
九三　治病の祈禱　病氣その他の災難を除く為の呪法、祈禱。
九四　祈禱の詞　神佛を拜む場合の唱へ言、呪言。
九五　共同祈願　雨乞、風祭、虫祈禱等の如き共同祈願のなされる機會と方法。
九六　道切り　村境等に於ける厄災除けの方法。
九七　通り神　神や悪霊に行き會つて病氣や怪我した話。
九八　衰弱感　疲勞衰弱を表す言葉。死期の豫知と覺悟。
九九　長生の家筋　代々長生する家筋あれば、その譯。
一〇〇　幸福な家　仕合せよき人や家の話。

どという長期間の調査はほとんど行われない。一回の調査は短く、資料をまとめた後補充調査に行くという方法をとることが多く、延べ日数にすると結果的に一ヶ月に及ぶというような方法をとる。この点は外国をフィールドとする文化人類学者が半年・一年あるいは数年に及ぶという滞在方法をとるのとは大きく異なる点である（文化人類学でも国内の場合は、民俗学の調査とそう異なることはない）。勿論、長く滞在して調査地の人々の生活を実体験しながら調査するという方法もあるが、日本国内を主たる調査地とする民俗学の場合、そこまでする必要のないのも事実である。なぜなら、日本という大きなくくりの中では、同質の文化を共有している民族であり、そうした意味では基層的な部分での文化を共有しているという認識が調査者にも調査される側にもあるからである。また、たんに調査地に長くいればいいというものではなく、要は確たる目的をもった調査がなされているかどうかによって、調査の成果は異なるということもいえる。

調査期間が短いという理由の一つとして、経済的な問題も大きく影響している。行政調査や研究機関から研究補助費用をもらった調査ならいざ知らず、一般的には自分の研究のために調査するのが本来の調査であるから、自分の懐と相談して調査に行かざるを得ない。特に仕事をもっていたりすれば、長期間の休みをとって自分の研究のために調査に出かけるなどということはほとんど不可能なことである（註9）。

②に関しては大間知の指摘の通りであり、調査地を知る上で基本的なデーターとなるものである。現在の調査では、このようなことはほとんどない。調査地を知るためには、市町村制要覧、農業センサスや林業センサス、過去に出版された市町村史誌の調査地に対する記述部分といった基本データーはあらかじめ入手するのが調査の基本となっている。その上で、調査地に足を踏み入れたときから（調査地までの道中も含め）、神社や寺の位置、家並みや家の造り、垣根や塀のようす、道の傍らにある祠や石碑、家々の軒下に吊るされている干し柿や干葉などなど、まずは観察することも重要である。

③に関しては、近年までそうした傾向にあったことは確かである。「古来一たびも文字あるものの考察に上がらず、いわゆる優雅階級が鄙俗として省みなかった部分に、この通り多くの消化せられざる知識、解釈を今後に期すべき厳然たる人間事実が、手付かずに残り伝わっている」（註10　二六〇頁）ことを調査し、後世に残すためには「筆者がこれぞ伝うるに足ると認めた事実だけを竹帛に垂れた」（註10　三〇三頁）歴史学の方法では駄目だと述べた、柳田の大きな影響があった。柳田の史学批判は、「書物はもとより重要な資料提供者と認め」（註10　三二〇頁）ることは

あっても、「実地に観察し、採集した資料こそ最も尊ぶべき」（註10　三二〇頁）ものであって、書物は採集した資料に比べれば小さな傍証としてしか役に立たない、といいきっているのである。むしろ、書物による傍証に力を入れ過ぎると、歴史と混淆した妙な危なっかしい「民俗学」ができあがるとまでいい、民俗学独自の調査方法をもって資料の蓄積をすべきだと主張している。言葉通りに受け取れば、「文献資料は使用すべからず」とも受けとれる言い回しであり、事実、かつては文献資料を使うことを嫌う研究者もいたことは確かである。八木透はそうした現象を、柳田の言葉だけを弟子たちが安直に受け止めたがための愚行であり、柳田は安易に文献を信じてはならない、きちんと資料批判をしてから使用せよ、と説いているのであって、文献の軽視は柳田に続いた研究者たちの問題であると指摘している（註11）。

しかし、大間知のこの指摘も現在ではかなり解消の方向に向かっていると言っていいだろう。農事日記・村規約・若者組み規約・個人日記・音信帳・家計簿などなどの文献資料を使った、論文などがいくつか見られるようになった。同時に、社会学や文化人類学など隣接諸科学の成果を積極的にとり入れようとする姿勢も見られるようになった。

④⑤は、調査方法も勿論であるが、調査後に調査した資料をいかに纏め上げるかということと関わっている。④は項目主義⑤は語彙主義などと呼ばれ、こうした状況を改善すべく一九七〇年代初頭には当時の若手研究者により『民俗調査ハンドブック』（註12）なる新たな調査項目が考えられている。『民俗調査ハンドブック』はそれまでの項目主義から脱却すべく、調査項目の配列が生活の実態により即したものへと工夫がなされた。そして、項目はあくまでも目安であって、地方地方によって伝承されている事象をいかに引き出すかに注意が注がれた。とうぜん、調査結果として報告されるものも、主観的な記述を除き、より客観的な記述へと形を変えていった。大間知が批判したような数字で表せる資料は可能な限りとりこむ努力が払われ、文献資料の活用や裏づけも行われるようになった。こうした結果として本来なら「個人個人の主観を越えた行為の法則性が支配する世界、様々な制度や組織が一つの総合的なシステムを形作る世界」（註13）描き出されることになるはずであったが、実際にはそうならなかった。かつてのものに、羅列的であるため調査地の生活の全体像が見えにくいとう苛立ちを感じたのと同じように、あまりにも「客観」という点にこだわったがために、調査地に生活する人々の顔も息遣いも聞こえてこないという不満が出されるようになった。大間知が批判した語彙主義も、実は言葉を通して人々の心意（感情・心の世界）を探るためのものであった

ため、それを排除してしまっては人々の生活とともにある主観に関わる言葉が聞こえなくなってしまうのは当然の帰結であった。その結果として、民俗語彙の見直しや報告書に話者の「語り口」を活かす記述の工夫がなされるようになっているが、「これ」といった調査方法の決まり手はいまだない。

⑥については、大間知の批判は言うまでもない。しかし、調査の結果として描き出された庶民生活の資料の蓄積は評価されるべきものであり、その資料の蓄積と共に日本民俗学の歩みがあったともいえる。④・⑤・⑥はともに、日本民俗学が新しい学問であることと、庶民の生活文化を人が人から聞き取りをして得る資料を基本にして成立する学問であると言う点で、これからも抱えつづける宿命的な問題点であるともいえる。

三　民俗調査の必要性

前節までで述べたように、民俗調査はいまだ様々な問題点を抱えている。調査方法論といったものが、多くの研究者を同一俎上に載せて議論されたわけでもないし、民俗学会が調査方法論についての議論を仕掛けるといったことも行われていない。依然として前節で述べたような問題点が解決されないまま、多くの民俗学研究者たちは今もなお「民俗調査」をしつづけている。かくいう筆者自身も長期・短期ふくめれば、年に十回ちかくは民俗調査に各地を訪れている。中には行政調査の一端として義務感にかられながら出かける調査もないことはない。しかし、どんな調査であろうと、調査地に到着し村や町や都市の中を歩いているうちに、知的探求心の方が勝ってくるのである。民俗学は庶民の生活を研究対象とていると先に述べたが、ありがたいことに人々がこの世で暮らしている以上、民俗学の研究対象はなくならない、と筆者は考えている。

桜田勝徳は、「そこで洗いざらいにそこのそうした民俗を劃地調査することがもしどこかでできて、それをやりとげることができたとしたら、もはや民俗調査は完了したものとして、その後にそこの調査を行う必要は全くないものと考えるような、そうした調査の態度で調査をしてきた」とそれまでの民俗調査の仕方を反省している。そのうえで、村や家生活は時と共に変化してきているのだから、移り変わる民俗のあり方を調査時現在の時点で捉えていくという従来の民俗調査の方法とは別な分野のあることに注意を払ってみたいと提唱している。桜田の提唱は、それまでのように古い体験者である古老のみに資料の提供を求めるのでなく、年齢・世代・家格・職業などの異なった話者を調査対象者とすることによって、今まで見えなかった民俗相や民俗差が見えてくるのではないかというのである。さ

らに、三年・五年・十年おきに同じ場所で同じような現在調査が重ねられると、調査時点が遅れたからといって、それだけ民俗資料が減じてしまうとは必ずしも決めてしまうことはできないともいうのである（註14）。まさに今日私たちが置かれている現状を明かに予測しているような、未来を見通した方法論への提唱である。

民俗事象は流動的なものである。実際に村の生活も町の生活も都市の生活も、日本全体の生活が時の流れと共に変化してきたことは周知の通りである。特に高度経済成長期以降、産業の発達により全国一律に都市化が進み、かつ情報の発達によって様々な情報が時を同じくして日本中を駆け巡ることになった。そうした社会の変化は村の独自性や異質の文化を急激に均し、日本全体を均一な文化にしていった。村は村でなくなり、村と都市との境界も明確ではなくなってきた。また、民俗社会の中では私たちが不必要だと考える事象は切り捨てていく（消滅していく）し、必要なものは新たな習俗として作り上げられていくものもある。私の子どもの頃（一九五〇年代）に、我が家ではクリスマス・家族の誕生日・両親の結婚記念日などを祝うことはしなかったが、現在はこうしたものが家庭の主たる行事の中心に据えられている（註15）。桜田が提唱した「従来の民俗調査の方法とは別の分野」をもってしても、人々の生活を充分に描き出せる調査はむづかしくなった。しかし、それでも民俗調査は行われ、その成果としての報告書の類や調査資料を分析し理論化した論文などが次々に生み出されているのである。では研究者は調査者となって、何を知ろうとするのであろうか。

一口にはいえないが、日本人が日本人としてもち伝えている生活文化とは何か、を知るためであり、それを知ることは自分の生活の拠ってきた道を知ることにも通じ、なおかつ自分の拠ってきた道を知ることはこれから自分が生きていく道しるべを持つことにもなるからであろう、と筆者は思っている。そして何を知ろうとするのかは、自分自身のおかれた生活環境や生い立ち・それまで受けた教育など、調査者自身の存在と深く関わって成り立つものである。例えば筆者にとっての調査の基準は、生まれ育った故郷の体験が基本にあり、それと調査地の話者たちの体験談や風景・植物・地理的条件などなどを比較しながら聞いている自分に気づかされる。調査項目が自分の故郷の民俗事象から拾い出されて作り上げられていくこともある。こうした状況をふまえてみれば、関心のあり方や得意とする分野は研究者個人個人で違い、百人の研究者がいれば百人の関心のもち方があるわけで、当然のことながらその関心のもち方によって、調査の方法も調査項目も違ったものになることになる。そして、研究者の関心も社会の情勢の変化にしたがって、少しずつ変化していくのであるから、調査

項目も少しずつ微妙に変化していくし、場合によってはまったく新たな項目を自分の中で組み立てて調査にあたらなければ、何の成果も得られないことになる。

一つの例を示そう。筆者は現在の民俗社会に生きる女性たち(特に主婦を中心にした女性たち)の日々の暮らしの中から、家や社会における女性の役割を探ろうとしている。筆者が女性だから女性に関することを調べようというのではない。目的は二つある。家庭内における夫と妻との関係や、女性とそれぞれの家族との関係性、あるいは地域社会のなかでの女性の活動の姿などを知りたいからである。こうした問題意識をもつに至ったのは、柳田の描き出した女性像と現実に暮らす女性たちの生活実態とに大きな隔たりがあることに、違和感を覚えたからである。民俗学は名もない庶民の女性たちの暮らしに早くから視点を注いできた特色ある学問である。それは、柳田の視点の持ち方によるものであったことは大いに評価すべきであるが、本当に実態を捉えていただろうか、という疑問がもたれる(註16)。調査項目が柳田主導の調査項目であり、その他の研究者は設定された調査項目によって営々と調査を続けてきた。民俗学として本格的な調査が始まった時点で、研究者の中には瀬川清子・能田多代子といった女性も含まれており、彼女たちは女性の眼を活かしたこまやかな内容の調査報告をしている。しかし、それでもなお、私が本当に知りたいと思う内容は少ない。蓄積された資料の中にも知りたいことがない、となれば自分で調査して資料を得るしかあるまい。

二つ目はそうした女性たちの生活を調べることによって、今まで明らかにならなかった男性たちの生活の実態も見たいというところにある。世の中は女性と男性によって成り立っている。その関係は片方の性だけが独立して生活をしているわけではなく、複雑に絡み合って綾を成しているわけで、一方の糸をほぐしてみればもう一方の糸の絡みもある程度ほぐして見ることができるのではないかと考えるからである。したがって、あるときは女性と男性の関係を見ることになるかもしれないし、女性と老人との関係を見ることになるかもしれない。あるいは、女性の暮らし方と物質文化との関係を見ることになるかもしれない。あるいは、そうしたもの全てを含んだ女性の暮らし方を見ることになるかもしれない。いずれにしても、今までの膨大な資料の蓄積をもってしても、筆者の要求を満たしてくれる資料と出会えないとき(そういうときが往々にしてあるのだが)、自ら調査に赴くことになる。もちろん、そうした生活は地域社会の中の一部として機能しているのだから、社会的背景や特質・変容を考慮しない調査では意味がないことになる。ということになれば、私は私の調査項目により、私の方法(流儀といいかえてもいいかもしれない)で調査をするより方法はない。

そして、調査地にいけば文献資料では見ることのできない、新たな生活の実態を、自分の目で確かめ、五感で感じ取ることになる。まさにこれが調査の醍醐味ともいうべきものであり、民俗学を続けている（いられる）大きな要因でもあろう。民俗学の資料はまさに、私たちの身の回りにいくらでもころがっており、調査をしないのは宝の山の中にいて何が宝なのか分からずにいるのと同じだと思っている。こんなに社会が動き日々様々な問題が起こっているとき、生きた人を対象に資料を得るという特色をもつ民俗学だからこそ、まだまだ民俗調査も必要であり、無限大の可能性を秘めているともいえるのではないだろうか。

おわりに

前節で、今だからこそ民俗調査は必要だと述べたが、調査すること自体が難しくなってきていることも確かである。大きくいって、二つの問題を抱えている。

一つは調査する側とされる側の問題である。民俗調査は調査する人とされる人がいて成り立つものであるが、調査する方は調査することによって資料を得、自分の問題意識を満たすことができる。しかし、調査される側は調査する側に付き合わされて、興味があるかないかに関わらず、調査者の質問に答え喋らなければならない。しかも、かなりまとまった時間（二時間くらいを目途としている）を、調査者に付き合わなければならない。調査される側にとったらこんな迷惑なことはないわけで、あらかじめ身分を明かすことはもちろん、調査の目的や訪問時間など、かなりこまやかな連絡をした上での人と人との信頼関係によって調査は成り立つものである。

キャッチセールスや宗教の勧誘などと間違えられたという話しはよく聞くところであるが、社会で起こる様々な事件などによって人と人との信頼関係はかなり危うくなっている。いい話をしてもらうためには、調査の目的をよく理解してもらい、誠実な対応をすることによって、まずは調査する側とされる側の信頼関係を作り上げることが必要であろう（註17）。

また、高齢者たちに対しても、社会の一線から退いているのだから暇だろう、などと考えていると大間違いである。ゲートボール・カラオケ・ダンス・旅行など様々な日程が組まれていて、ほとんどあいている日がないという高齢者も稀ではない。あるいは地域の役職についていたり、定年後も勤めつづけているという人もいる。高齢者の暮らし自体がかつてのようなのんびりしたものではなくなっていて調査に値するのだが、調査に付き合ってじっくり話をしている暇はないという人も多いのである。

もう一つは調査者の側の問題である。明確な問題意識を

もって調査をするとき、かつての調査項目で事足りるところもある反面、全く違った切りこみ方をしなければ得たい資料は得られないことも多い。民俗社会が多様化していることとあいまって、調査における調査項目も一様ではなく、かつてのような調査における目安とか一定の基準というものがほとんどなくなったといってもよい。何を指標にして調査を行えばいいのか、非常に見えにくくなっているために、調査もしにくくなっていることは事実である。しかし、それは聞くべき民俗事象がなくなったために調査がしにくくなった、ということではない。調査者の問題意識がどこにあり、調査者が何を見ようとするかによって、調査の成功不成功は決まるといってもよいだろう。

さらに、話者とする人々と研究者との間のコミュニケーションも取りにくくなっている。生活文化の変遷とか伝承性というものを問題にしてきた日本民俗学は、その問題意識を今も失ってはいない。そこで、どうしても資料を提供してくれる話者はある程度の年代以上の人を選ぶことになる。よく、都会育ちの若い研究者が農家などに調査に行って、話者の話している内容に理解できない部分が多いと、嘆くのを目にすることがある。手作業で田を起こし、馬や牛にマンガを付けて代掻きをし、手植えで田植えを行っていたころの話しから、機械化された現在までの農作業の移り変わりのようすを聞いても、体験のない者にとって分からない部分があるのは当然のことである。精米されて売り出されている白米しか見たことがない者が、何の準備もなく農作業の手順を理解しようとしてもそれは無理というものであろう。そうでなくても、話者との話しのリズムが合わないとか、話者の話す内容に素直に相槌が打てないなどなど、調査は楽しいことばかりではない。やはり、調査をするためには事前の念入りな準備が必要であり、そのためには調査地や問題とする内容に関する情報をできるだけ多く仕入れて行くことである。

準備をして出かけてこそ、ふっとした話の中にそれまでにはなかった新たな発見が生まれるのである。その新たな発見に期待して、民俗調査は続けられてきたし、これからも続けられていくだろう。筆者もまた、机上にしがみついている研究者よりも、新たな発見に期待してこれからも調査を続けていきたいと願っている。そして、得られた資料は調査者一人の力で得られたものでなく、話者や地域社会と共有できてこそ、資料によりいっそうの輝きが増すものであることを改めて心に命じておきたい。

註

註1　日本民俗学の創始者柳田国男個人としては一九〇八年（明治四十一年）法制局参事官として農村視察の途中宮崎県椎葉村を訪れ、村長中瀬淳から椎葉村に伝わる猪狩りや鹿狩りの

様子を聞き、最初の民俗誌『後狩詞記』を残している。『後狩詞記』は『柳田国男全集』五（ちくま文庫）所収。

註2　柳田国男編『山村生活の研究』一九七五（昭和五〇）年六月　国書刊行会（復刻版）

註3　註2（五四九頁）

註4　関敬吾「はしがき」『日本民俗学大系』十三　一九六〇（昭和三五）年八月、平凡社

この巻には民俗調査に対する方法論が関敬吾をはじめ、大間知篤三・桜田勝徳・竹内利美・最上孝敬・石塚尊俊・小野重朗・井之口章次・郷田（坪井）洋文といた当時の若手研究者を初めとする錚々たるメンバーによって書かれている。その方法論・姿勢は今日にも充分通用する所が多い。

註5　註4に同じ（四頁）

註6　一九六〇年代後半に迎えた日本の高度経済成長期は、緩やかな文化変化の中に置かれていた農山村にも大きな変化をもたらすことになった。こうした社会状況の変化にいち早く対応し、農村の都市化や都市に住む人々の生活に関心を示したのは宮田登であったが、宮田に続き倉石忠彦・小林忠雄・岩本通弥・中村浮美などがそれぞれの視点で、それまでの農山漁村という調査地から都市化地域や団地族の暮らし・地方都市の人々の暮らし・都市の祭礼・都市に起こる社会問題などに目が向けられるようになった。一九七〇年代前半には都市あるいは都市化地域の生活事象を扱ったものを総括して「都市民俗学」などと呼ぶようになった。波平恵美子などの脳死や臓器移植を扱った論考、野本寛一・篠原徹・安室知などによる生態系と自然環境などに関する論考などなど、民俗学は現在に生起する様々な問題に眼を向けている。

註7　大間知篤三「民俗調査の回顧」『日本民俗学体系』一三　一九六〇年　平凡社

註8　註7に同じ

註9　筆者は長野県を主たるフィールドとし、長野県内をはじめとするいくつかの行政調査の仕事に携わらせてもらっている。そこでは、同じ仕事に携わる仲間たちと民俗調査をするが、本務（小中高校の先生・公務員・会社員など）をもっていながら行政調査にも携わっている人々がほとんどである。そのため、調査は夏休みや冬休み中に行うという手段をとり、それも二泊三日などの日程が仕事に影響を及ぼさないぎりぎりの期日である。ましてや、自分の研究のための調査に休みをもらって当てるなどということはほとんど不可能に近いというのが、現状である。それでも、各々かなりの業績を上げている。

註10　柳田国男「民間伝承論」『柳田国男全集』二八　一九九〇年一二月　ちくま文庫

註11　八木透『フィールドから学ぶ民俗学』　二〇〇〇年五月　昭和堂

註12　上野和男・高桑守史・福田アジオ・宮田登編『民俗調査ハ

ンドブック』一九七四年　吉川弘文館

註13　中込睦子「認識と記述」佐野賢治・谷口貢・中込睦子・古家信平編『現代民俗学入門』一九九六年　吉川弘文館

註14　桜田勝徳「調査の態度とその方法について」註4に同じ（十六頁～十七頁）

註15　浦安市は漁村であった元町と、新町と呼ばれる新浦安駅周辺の新興住宅地とに分かれるが、新町の方では「子どもが喜ぶ」行事（雛祭り・五月節供・七夕・月見）などが行われるほか、家族の誕生日・結婚記念日・クリスマスなどが大切な行事の日として認識されている（『浦安市史　生活編』一九九九年三月　浦安市史編さん委員会）。つまり、イベント化できる行事に関心があり、このへんは世代間で考え方にかなりのギャップがあるものと思われる。家庭のクリスマスがイベント化している典型的なものとして、町田市や横浜市の住宅街における電飾のクリスマス飾りがみられる。家々に年々見せようという（あるいは見て楽しんでもらおうという）意識が芽生えているようで、それをまたメディアが煽っているという構図がみてとれる。新たに生み出され・創りあげられ・定着していく民俗事象はメディアの媒体によるところが大きい。各地の阿波踊りや○○よさこい祭りなど、よく観察すれば現在ではそうしたものがかなりみられる。

こうした傾向は地方都市などに住む核家族の間でも次第に見られるようになり、正月や盆などは夫や妻の生家で行うため自分たちでは行わないが、子どもの誕生日・クリスマス・節供・七夕・七五三などは子どもが喜ぶからとか、子どものために行うといっている。（『松本市史』などの調査で訪れた家での雑談などの折にも、そうした話を聞くことができた）。

註16　拙著『柳田国男と女性観』一九九五年　三一書房

註17　福沢昭司「フィールドワークの課題」『日本民俗学』二一六号　一九九八年

福沢昭司は、調査者と話者との関係について、民俗調査は現地で資料を提供してくれる話者と調査者との共感の相互作用によって初めて成り立つものであるとし、次のように述べている。「話者に共感しつつ苦しみながら実践を重ねる研究者も少数ながらいる。できるならば、自分もそちらに与したい。フィールドは苦痛の場であり、そこで悩むのが当然であるし、そうでなければフィールドへ出る資格はないと思う。とはいえ、苦しむだけなら誰も好んで調査にでかけはしない。未知との話者との出会いは、苦痛もあるが多くの人の生き方に触れられるという点で、楽しみでもある。また、話者との共感やそこで悩むことを通して、調査者である自分を変えていくことができるはずである。そうした積み重ねの結果、自分の手元に資料が残る。そんなうまい話があるはずだと信じ、さあ書を持ってフィールドに出よう」と。

（くらいし　あつこ・民俗学）